

伊藤利之・江藤文夫(編)
中村春基・宮永敬市(編集協力)

「新版 日常生活活動(ADL) —評価と支援の実際—」

隆島研吾
(神奈川県立保健福祉大学リハビリテーション学科
理学療法専攻)

ADL(日常生活活動・動作)は、リハビリテーション医療の中核をなすものとして、QOL 向上を最終目標とする現在でもその価値が下ることはない。

本書は、土屋弘吉先生、大川嗣雄先生、今田拓先生というわが国リハビリテーション医療の第一人者の先生方による編集で、1978 年(昭和 53 年)に「わが国における ADL に関する最初の単行本として」(初版の序より)刊行され、第 2 版は 1982 年(昭和 57 年)、第 3 版は 1992 年(平成 4 年)と版を重ね、第 3 版は 20 刷まで増刷が重ねられてきている名著である。内容も、ADL の概念・範囲・意義をはじめ、評価、運動学と障害学、生活関連活動、自助具、リハ機器、コミュニケーション、障害別 ADL の実際、在宅障害者の ADL など、およそ ADL の全体像が網羅されていて、臨床で、また教科書としてその存在価値は大きいものであった。しかし第 3 版改訂から 18 年が経過し、編者がすべて故人になられた今、新たに伊藤利之先生、江藤文夫先生という現在のリーダーである先生方にバトンタッチされ、新版としてリニューアルされたものである。章立ては前版を踏襲しながらも執筆者がほぼ一

新され、最新精鋭の先生方による内容となっている。

ところで ADL の概念は、ADL に家事を含めるかどうかなどの議論や、生活関連動作、QOL との関係、ICF(国際生活機能分類)との関係などやや混乱気味である。本書では、第 1 章(日常生活活動の概念・意義・範囲)、第 2 章(生活関連活動)、第 3 章(国際生活機能分類)に、その歴史的経緯を含めて丁寧に解説されており、読者の理解を助けるものと確信する。特に、第 3 章の国際生活機能分類の項で ADL と ICF の関係にも触れられており、その内容は示唆に富んだものである。疾患別 ADL の項では、脳性麻痺が新たに乳幼児期～学童期と成人期以降にわけて解説されていることは特筆される。また、今回は在宅障害者への支援方法と高次脳機能障害への支援方法が付章 I および II としてまとめられており、近年新たに積み重ねられてきた最新の情報がまとめられているものとして意義深い。

新版の序にあるように、メタボリックシンドロームの改善に貢献できるかどうかは不明であるが、B5 判から A4 変型判とサイズアップされたことで見やすくなり、また写真を多く用いるなどビジュアルに十分配慮されており、最近とみに焦点が合いにくくなってきた私にも大変助かる新版改訂である。臨床のバイブルとしてのみならず教科書としても、今まで同様の価値は変わることなく、引き続き手元において座右の書としてお使いいただくよう推薦したい一冊である。

●A4 変型判・360 頁・2 色刷
定価 7,140 円(本体 6,800 円+税 5%)
2010 年 医歯薬出版・刊